



おしゃれな景観とは、都市にとって一体どのようなものだろう。洒落たビル建築と創造された自然の緑や花との融合、これも良いだろう。

しかし、博多の町は六月下旬から七月十五日まで山笠の季節を迎える。山笠は、博多の風物である。

その山笠の各流れ法被を身に纏った男衆が、ぞろぞろと流れ周辺をそぞろ歩く。その法被姿と都市のビル、そして商店街とがマッチして普段とは違う別の「洒落た景観・空間」を作り出す。代々受け継がれてきた博多の町の伝統を守り続ける心意気を象徴する法被姿の男衆と町並みは異和感を感じさせず、都市景観として据えられ、景観自体が今生きている。

人の生活の日々の営みが、まさに景観そのものである。むしろ、都会と言える博多だからこそ、山笠の法被姿の男衆は、新鮮である。私は、山笠



おしゃれな景観

おおくぼ ゆづこ
大久保裕子

福岡市東区



博多山笠で法被姿の男衆がそぞろ歩く。その姿と街並みの関係に「おしゃれ」を読み取る着眼が優れている。都市景観には、人々の生活や、心意気とでも言うべき緊張感や躍動感が必要なことを示唆していて、新鮮である。

(審査委員 森岡 侑士)

のとき限定の法被姿の男衆のそぞろ歩きは「洒落た景観」と言えると思うのである。

そのポスターを見たのは、桜も終わり柔らかな日差しが嬉しい頃、ランチを摂ってオフィスに戻る途中でした。「大名・赤坂のかくれがこの上にあります。」と謎めいた縦書きの文面そして紙面の下側に2列書きで「五感をやさしく刺激 Sky Station」背景に淡いグリーンを敷いてある。ポスターはビルのエントランスの壁に貼られていました。地下鉄赤坂駅の真上のこのビルの1階は装飾過剰味のドラッグストアと携帯ショップ。このポスターは何かしら？付け足しのように「無料」と書かれている。確かめてみたくなった。昼休み残り時間を気にしながら案内の10階のエレベータボタンを押す。エレベータのドアが開くと小さな踊り場があった。開いている扉の向こう側に立つ。そこは一面明るい緑の芝生。芝を取り巻くように柵植の生垣にオリブや樺木が低木で点在している。大きな広い空、東側には脊振の山脈が福岡の街に屏風のような奥床しさを鎮座してい



赤坂、天空の庭

おしみ じょうと
押見上子

福岡市中央区



作品「赤坂、天空の庭」は、一階部分の猥雑な雰囲気を導入部に、油山、大濠公園などの借景を巧みに織り込みながら、BGMを演出の道具に使い、福岡らしい景観をさりげなく見せており、小粋なおしゃれを感じさせるエッセイである。

(審査委員 松本 法雄)

る。「山はいいなあ」。眼下に舞鶴公園の白壁に黒瓦を載せ曲線屋根の櫓。時代を抱いたその向こうに見える水面は大濠公園の池。海水を含んでカルチエのパッケージのようなブルーだ。オレンジを含む萌黄色の若葉は、ルノアールの筆使いを思わせる。「九州の春色だ」。ビルの壁側にはどっしりとしたウッドデッキと日除けがしつらえられている。なんておしゃれな風景だ。借景と人工が見事だ。ここは屋上に適した植物と軽い土の開発研究所兼シヨールームが目的と説明書きにあった。「ご自由にお過ごしください」とも添えられている。BGMは都市の音で賄う。さりげなくそれでいてしっかりと手入れの行き届いた天空の庭です。道路沿いの控え目のポスターから、だれがこの空間を想像できよう。歴史と自然の融合を上等なデザインで構成した日本一、いや世界一おしゃれな天空の庭を、8カ月前から住み始めたこの福岡で見つけました。



夫と朝歩きをしながら通る高校の正門を、私は心の中で、「黒門さん」と呼んでいる。

福岡県立香椎高等学校の「名物門」で、学校のシンボルになっている。

この門の前に来ると、扉がおもむろに開いて、中から大行列が出てくるようで、「いいなあ」と楽しくなってくる。

黒門は、季節ごとに、それぞれ異なった顔を見せてくれる。

私は、雪景色の中のとたずまいが好きで、足を止め長々と見入ってしまう。

夫と夫の姉妹も、この学校の卒業生である。

夫の説明によると、黒門はもともと、奥州中村藩の流れをくむ旧相馬子爵邸の表門であった。それを譲り受け、旧制香椎中学の正門として移築されたものだった。その後、台風などにより二度倒れたという。

そして、凡そ五十年振り、卒業生達



黒門さん

もり ちえこ
森 千恵子

福岡市東区

散歩での楽しいな語らいは、健康だけでなく感性も刺激するのでしょうか。風景として目にとまっていた校門が、作者の豊かなイマジネーションで、「黒門さん」という情景となった様子が心地よく伝わってくるエッセーです。

(審査委員 中村 敏子)



の愛校心と努力により復元されていた。

夫が屋根の黒瓦を指差して、

「あの瓦のどれか一枚の裏に、俺の名前もある」と、嬉しそうに言った。

今では、周りの住宅地の景観の一部として、すっかり溶け込んでいます。近くの香椎宮の「綾杉」とも日々、会話しているような気がした。

黒門は、平素は閉まっているが、入学式と卒業式の際は開けられる。入学時は、夢いっぱいの若人達を、大きな手を広げ迎え入れる。

また卒業の時は、未来への旅立ちにエールを送って、学校行事に彩りを添えている。

私はこの話を聞いて、黒門を挟んで新旧の歴史が交流しているようで、とても粋な計らいではないかと嬉しくなった。

現代っ子達が、黒門を通り抜ける様が、なんとも、おしゃれで微笑ましい限りである。

いつもスーパーの帰りは、表通りをバスで素通りしてしまふ。でも、その日は買物袋もそう重くなかったし、春の風が穏やかで暖かだったので、住宅の間の小道を散歩を兼ねて歩いて帰ることにした。

私の住む東区高美台は、市公社が分譲した新興住宅地である。入居して三十年以上になった。入居した当初は、街路樹も家々の庭木もまだ小さくて、夏など木陰もなかった。年月が経ち、今ではどこのお宅も庭木が伸び、枝が茂り、季節には花が咲く。そして、幼かった子供たちは成長し、かつてのPTA仲間とは疎遠になってしまった。

その日歩いた小道は、あの頃小学生だった子供たちを連れて、まだ若かった私が頻りに通った道だった。近くなのに減多に通らなくなって久しい。まるで知らない道歩いている気分だった。

道の両側はおしゃれにガーデニングされたお庭が続いている。赤、黄色、ピンクに紫など、色鮮やかな花が門口から玄



花咲く小道

やまぐち みちこ
山口 道子

福岡市東区

何気ない風景に刻まれた3つの異なる円環。日常生活・人生・自然のサイクルだ。3者は時の進行とともに、人に発見をもたらし、再び元に戻る安心を与える。激しく変化する時代の中で、小道を歩く風景が、心にしみる所以だろう。

(審査委員 山下三平)



関までを覆い、穏やかな春の陽が命のしずくを降りそそぐかのよう、さらさらと優しく包み込む。パンジーにペゴニア、ナデシコにマーガレットくらいは私にも分かる。あの一際赤い花の群れは何という名前だろう。青い小花もある。私は時々立ち止まり見とれてしまふ。

そんな一軒の、庭を見下ろすベランダに人影が現れ、布団を取り込もうとしていた。思わず目が合い会釈をする。髪に白いものが目立つが、下の娘のかつてのPTAのお仲間には違いない。センスがあつて、こまめに体を動かす方だったから、おしゃれなお庭は彼女の日頃の丹精の成果なのだろう。

右のお庭を見て、左のお庭を見てゆっくり歩いていると、散歩帰りらしいご夫婦と出会った。顔なじみの奥さんと言葉を交わす。

「どこのお宅もお花がきれいでしょう?」「ほんとうに、見とれてしまいました」

花咲くおしゃれなお庭は十五分ほど続いた。